

永久保存版

mild Vind

ミルヴィン

2026.8

Nr. 6

やさしい風を届ける TENA ニュースレター



明日につながるやさしさ

“世界標準ケア”フォーラム

～国際規格ISO25557日本初公開記念講演～

高齢者ケア分野で新たに策定された国際規格「ISO25557」。その背景と理念を共有し、世界標準を実践につなげることを目的として2026年6月29日に明治記念館で本フォーラム(主催:国際ケアシステム、共催:ユニ・チャーム メンリッケ)を開催しました。この策定に日本代表メンバーの一員として参画されたグスタフ・ストランデルさんのご講演(p2～p4)、また弊社代表取締役社長登坂英崇とのパネルディスカッション(p5)、登坂による講演(p6～p7)の模様をお伝えいたします。



グスタフ・ストランデル / 1974年生まれ。武蔵野大学ウェルビーイング学部教授。ユニ・チャーム メンリッケ(株)顧問。専門は、高齢者福祉、介護学、日本とスウェーデンのほか、世界各国の介護事情に精通している。

ケアを巡る人類の歴史

約4000年前、スウェーデンの洞窟に描かれた壁画には、高齢者が若い世代へ知恵を伝える姿が残されています。狩り、ものづくり、収穫と、定住する部族内での役割分担とともに描かれており、人々は古くから年を重ねた人を社会の担い手として受け入れてきたことがわかります。しかし一方で、その歴史は決して美しいものばかりではありませんでした。

日本には長野県に「嫉捨(おぼすて)」という駅名が残されています。この言葉は、介護が必要であるなど自立した生活ができない高齢者や体の弱い親族を山に置き去りにしてきたしきたりがあったことを物語っています。

これは日本特有の因習ではありません。驚くことに文化や歴史も違う遠いスウェーデンはもとより、世界各地で類似の文化や伝承が存在しています。定住する農耕部族では干ばつなどによる食糧難、住処を転々とする狩猟採集部族では、仲間を守るために「ついて来られない者は見捨てる」手段しか持ち得

ない背景があったのでしょうか。

そうした数千年前の暮らしからは考えられないほど現代の医療技術は進歩し、人々の平均寿命は延び、世界は高齢化社会へと歩みを進めました。

ご存じの通り、総人口の7%を高齢者が占める社会が高齢化社会です。日本が総人口の14%以上を占める高齢社会になるのに要した年数はわずか24年間。世界最速です。

日本より早く高齢化社会を迎えたスウェーデンでも、14%に達するまでには85年かかっています。急激な高齢者人口の増加により日本は、介護人材の不足やケアシステムの機能不全など、非常に多くの問題に直面しました。そんな日本に対し、高齢化社会の先輩であるスウェーデンが提供できるものがあるのではないかと。私はその思いで、日本国内はもちろん、韓国、中国、シンガポール、ベトナム、ヨーロッパ、ドイツなどで約350ヶ所の介護施設を訪問してきました。そこで目にしたのは、国も文化も違うにもかかわらず、介護現場が驚くほど共通した失敗をし、似た課題を抱えている現実でした。

国や地域が違っても 同じ失敗を重ねる介護現場

私は施設訪問時に「香り」「ドアに鍵がかかっているか」「拘束されているか」「食事」「プライバシー」と日常生活として「ご家族の訪問」といったチェックポイントを確認しています。特に施設へ入った瞬間の空気や臭いは、その施設のケアの質を映す一つの指標になります。排泄物や消毒剤の臭いが強く残る施設では、ご利用者の生活よりも管理が優先されているケースが少なくないからです。私が訪問してきた介護施設では、独特の臭いを放ち、入居者が快適な環境で過ごしているとはいえない状態を多く見ました。

一例をあげましょう。1998年に日本のある介護施設に招待されたスウェーデンの認知症ケア専門家のレポートには次のように記されています。「介護予防が行われておらず、寝たきりと褥瘡の方がほとんど」「骨折した高齢者の対応には『1ヶ月横になって寝なさい』という医師の判断に疑問が持たれていない」「入居者のほぼ全員がおむつの着用、トイレに連れていくことを考えてもいない」「『おしっこが余計に出るから水をあまり飲ませないほうがいい』と発言する医師が反論されず、体調不良になったら点滴をつける」。

人間の基本的な欲求である「呼吸」「食事」「水」「睡眠」「排泄」の管理は十分に行われています。しかし、それらの欲求を満たすだけでは、入居者の幸福は実現できません。この当時のケアは、入居者の自由や幸福を奪うものになっていたのです。

外国から学ぶ日本

こうした状態から日本は、わずか30年弱の期間で急速にケアシステムを充実させてきました。スウェーデンから来日したパーソンセンタードケア・緩和ケア・当事者視点の専門家たちから多くを学び、介護の負担を家族から社会全体で支える形にした「介護保険制度」を創設し、住み慣れた地域で最後まで自分らしい暮らしを続けられるよう「住まい・医療・介護・予防・生活支援」が一体となった提供される「地域包括ケアシステム」を構築したのです。これは並大抵の努力ではありません。寝たきりを前提とした拘束型の介護から、自立した生活支援を中心にご利用者自身の幸福を追求する仕組みへと変化したのです。

こうした意欲は、当時の日本の介護関係者が現状の体制に疑問を持って取り組まれ、先駆的なシステムを探していたことに原点があるでしょう。スウェーデンで取り入れていたユニットケアの紹介時に、日本全国から介護関係者の方が数多く集まり、熱心に学んでいたことが印象に残っています。しかし日本はただ海外から学んだだけではありません。

専用の個室と共同リビングによって自宅に近い環境で過ごせるユニットケアの考え方をベースに、日本の生活様式に合わせた住環境を考案し、ケアの方法を工夫していったのです。洋室では施設らしさが強くなると、和室を取り入れて家庭に近い空間を実現した施設もありました。スウェーデンの考え方を取り入れながら、日本の文化や風土に合わせて発展させた、そのことが極めて重要です。

介護施設で開催する地域交流イベントでも、スウェーデンと日本で文化の違いが垣間見えます。個人主義の強いスウェーデンではご利用者の夫妻や友人という一世代での参加が基本です。一方の日本では、自身の子ともから孫、ひ孫に至るまで3〜4世代が来訪し、交流するケースもあります。介護施設が単なる介護サービスの場から、地



スウェーデン：ご利用者の夫妻や友人とのダンス交流会（上）／
日本：子どもから孫、ひ孫の3〜4世代が一緒にブツネ合奏（下）

タブーから当たり前に そして日本の実践を世界へ

域の人々や家族が自然に集う共同体として機能しており、私はその光景を見たときに、とても嬉しく感じたことを今でも覚えていています。

スウェーデンの概念に学びつつ、自国の文化や風土を生かしたケアを実現してきた実践知は、世界共通の課題を解決するモデルケースとして日本から飛び立つことになります。

2006年に公開された「明日の記憶」という映画をご存じでしょうか。渡辺謙さんが主演した作品で、若年性認知症を患った夫とその妻を描いた映画です。2017年には介護施設で認知症介護をするケアスタッフを描いた映画「ケアニン」あなたでよかったも公開されました。認知症や介護の当事者の視点を中心に描く作品は、長くタブー視されてきたように思います。そのテーマを扱った作品を米アカデミー賞ノミネート俳優である渡辺謙さんが主演したことは、私にとって大きな驚きと喜びでした。しかし昨今ではそれが当たり前のことになっています。一般社団法人日本認知症本人ワーキンググループなどの当事者団体が生まれ、各地で認知症を抱える人との共生社会を目指した取り組みも行われ始めています。認知症の方々を起用した認知症カフェは、約8000ヶ所運営され、認知症サポーター養成講座の受講者数は1500万人にのぼります。認知症当事者が組織をつくり、成功事例発信、行政への提案など、ここまでできている国はほとんどありません。

近年の研究では面白い研究データが出ています。高齢者のフレイルと「身体

活動」「文化活動」「ボランティア・地域活動」の相関関係を調べたところ、何もしていない人はすべて行っている人に比べてリスクが高くなる一方、「文化活動」と「地域活動」を行うだけでもフレイル予防につながることがわかってきています。こうした研究成果からも、日本の地域包括ケアやインクルーシブケアの仕組みは大きな意義があることが証明されているのです。

日本の施設のように比較的小規模につくることの重要性も明らかになってきています。中国などからの視察者から「なぜ大規模にしないのか」と聞かれることも多いのですが、入居者同士が互いを覚えられて安心できる環境をつくるという視点から見ると、施設が大きすぎないことも大切なのです。

こうした日本の実践と積み重ねが今、世界から注目されています。今回のテーマである介護品質の国際規格「ISO 25557」制定に向けた第1回会合のとき、イギリスの代表者は全員の前ではつきりと、「私たちは日本の地域包括ケアを参考にしている」と発表しました。日本は「海外から介護を学ぶ国」から「世界に介護を発信する国」へと変貌を遂げ、新たな役割を担おうとしています。そしてより良い介護の未来を世界各国とともに築く立場へと、大きな転換点を迎えているのです。

国際規格「ISO 25557」の策定はその象徴ともいえる取り組みの一つです。

ISOは、国際標準化機構が策定する国際規格で、各国から代表者が集まってつくっていきます。これまでも「IC314 (Aging societies: 高齢社会)」では、高齢者就労支援、介護者共生社会、認知症共生社会などの成功事例を基にした介護に関わる基準を、参加各国が

互いの事例を持ち寄りながら制定しました。そして、今年「ISO25557」高齢化社会―在宅および介護施設における高齢者のための介護品質」が策定されました。基準といっても、世界中の介護施設や地域社会に同じやり方を求めるものではなく、国や文化、制度の違いを尊重しながら、介護の質を高めるために重要な基本的な考え方を共有し、それぞれの国の実情に合わせて実践できるように整理したものです。

関わる人すべての人に ウェルビーイングの充実に

「ISO25557」の核となる考え方の一つは、「ウェルビーイング」です。国際基準では、高齢者（利用者・入居者）・介護職員・家族といったすべての当事者のウェルビーイングを実現することを目指しています。ISOに定められたチェックリストを使って現状を可視化し、その結果を基にPDCAサイクルを回していくことで、継続的にケアの

質を高め、身体的、精神的、社会的により良い状態を実現していくことができようになっています。この考え方の根底には、介護職員、家族も含めたすべての当事者のウェルビーイングを実現することが、介護の対象となる本人のウェルビーイングを本来の意味で実現することにつながるという考えがあります。

この点は、排泄ケアを例にとるとわかりやすいでしょう。日本でも、おむつの交換回数が多いことがサービスの質の高さの証明だといわれた時代がありました。夜間、おむつ交換を2回以上行う施設が過半数を占めるという統計データもあります。夜間の暗い場所、知らない人に何回もおむつを交換される姿を想像してみてください。安眠から程遠い毎日であることは容易にわかるにもかかわらず、交換回数が多いことが良いことだという思い込みが蔓延していたのです。それでも年を重ねるごとに夜間交換数は減っており、0〜1回の施設が増えています。これに

よって、介護職員の負担も軽減され、手の空いた時間をほかのケアに使えるという利点もあります。

とはいえ、質の高いケアを実現するには理念だけでは十分ではありません。今後スウェーデンでは80歳以上の人口が約40%増加することが予想されており、介護人材の不足が懸念されています。少子化の進む日本やデンマーク、台湾なども同様の課題を抱えています。かつてタブーだった「ケアの生産性」という課題にも直面しているのです。今回のISOはそれを実現するための基準としても活用できる内容になっています。

近年では、センサーやロボット、AIを駆使して高齢者の生活を支援するエッジテックも注目を集めています。効率化が求められ、技術が進歩する時代だからこそ、ISOの基準とチェックリストを活用して、ウェルビーイングの実現を目指す姿勢が介護業界全体に広がってくださることを願っています。

家族から社会全体へ 介護が導く文化の進化

人類の歴史を振り返ると、長い間、高齢者のケアは家族や部族の中だけで行われてきました。コミュニティ外の人を助けるという文化はほとんどなく、時には見捨てたり命を奪ったりすることさえ珍しくありませんでした。日本でも、「親の面倒は家族で見ろ」という常識があったことをご記憶の方も多いのではないのでしょうか。現在のような専門的で複雑な介護は存在していなかったために家族などの負担はとても重いものでした。冒頭で述べたような残酷な事実が生まれた背景にもこうした事実がありました。

しかし、現代は大きく変わりました。ISO25557が示す国際的な考え方は、家族かどうか、同じ民族かどうかに関係なく、人をケアすることが当たり前の価値観になっていきます。例えば、日本では現在、約4万人以上の外国人が介護現場で働き、日本人の高齢者に認知症ケアなどの高度な介護を提供しています。これは単に人手不足の問題ではなく、人類の歴史という長い視点で見ると、「血縁や部族を超えて他者を支える」という、これまでになかった文化の誕生です。

遺伝子の専門家でノーベル生理学・医学賞を2022年に受賞したスバンテ・ペーボ氏が来日したとき、彼に「人種の違う人間をケアするというのは、人類の進化ではないのか」と聞いたことがあります。彼の答えは、「生物学的進化とはいえないが文化的進化が起きた」というものでした。世界各地で「家族でなくても、あなたを支える」という社会が築かれ始めています。これは人類にとって希望のある、社会的、文化的な進化が起きているのだと私は思っています。そして私たちは、人類史の中でも非常に画期的な転換点にいるのではないのでしょうか。

パーソンセンタードケアや地域包括ケアが世界各地で実践されるようになった現在、かつては理想と考えられていたケアが、現実実践できる段階になっていきます。ISO25557は、そのための共通言語として世界中のケアをつなぎ、次の世代へ知恵を受け継いでいくための国際規格です。介護の標準化とは技術をそろえることではなく、人の尊厳を守るという共通の価値観を未来へ残していく取り組みなのだと私は思っています。

ISO25557 基本理念

尊厳をもって生活し、
心身の健康と幸福が促進されること

自尊心と自分の能力への自信が育まれること

プライバシーと人格が尊重されること

自己決定が支援されること

本人中心のケアが提供されること

あらゆる支援において
本人の同意が継続的に確認されること

安全で安心できる生活環境が確保されること

活動的で生きがいのある
社会生活に参加する機会が保障されること

国際基準が定めるケアの質と日本の現場への導入

ISO25557が目指す
ケアの質とは

グスタフさん ISO25557が制定されたといっても、これまでのケアが否定されたり、全く新しいものになったりするわけではありません。講演でも述べた通り、日本では約30年にわたってパーソンセンタードケアを充実させてきました。それは海外のものをそのまま導入したのではなく、日本の文化や風土に合わせて発展してきたものです。日本でも昔は、ケアは家族がするもので、他人に任せることは間違っているという意見が一般的でした。実はこうした風潮は世界各国に存在します。そこから30年かけて脱却し、地域内で提供されるさまざまなサービスの支援を受けながら家族と専門家が連携してケアする今の形が発展してきたのです。

ISO25557が目指しているケアも、家族の代わりを施設が果たすことではありません。家族と協力しながら、専門職や地域で提供されるさまざまなサービスを活用しながら本人の生活を支援することを目指しています。日本ではすでに質の高いものができている。それを海外の事例も参考にしながら、よりレベルアップさせようというのがこの国際基準の考え方です。

登坂 ケアの質を高めるうえで重要なのは、個々のご利用者への対応だけではなく、施設全体として質を生み出す



登坂（左）とグスタフさん（右）によるパネルディスカッションの様子

仕組みをつくることです。その仕組みは、大きく三つに整理できます。第一に、施設の「外」から刺激を取り入れること。排泄ケアであれば、紙おむつのブランド選定に加え、メーカーにどのような支援を求め、どのように関わってもらうかを明確にすることが必要です。また、他施設との交流を定期的に持つことで、外部の情報や示唆を取り入れ、組織として学び続ける姿勢を保つことができます。第二に、スタッフが自立し、やりがいを持って働ける環境を整え、施設の「内」にあるエネルギーを最大限に高めることです。そのためには、チームケアの推進が有効な手段となります。第三に、施設全体として目指す定性的な成果と定量的な目標を明確にす

ることです。この三つを確立し、持続的かつ発展的に循環させていくことこそが、ケアの質の向上であると考えます。

施設で実装するうえで
どんな課題がありますか

グスタフさん 日本が諸外国と比べて

深刻なのは、介護人材の不足です。高齢者人口が増加する一方で、介護従事者数は減少傾向にあるのです。その課題を解決する処方箋の一つが、テクノロジーの活用だろうと思っています。ほかの業界ですでに導入されている良い技術があれば、介護業界でも使うべきです。例えばセンサー技術。この技術は、コロナ禍で一気に導入が進みました。これによって現場の負担がとて減ったし、ケアも充実させられたことは皆さんも実感されているところだと思います。

ケアプランや記録の作成も、AIを使えばもっと楽になるかもしれない。ISOでもテクノロジーの導入は推奨しているので、ぜひ検討してほしいと思います。

登坂 医療や介護の現場でもAIテクノロジーの導入は進んでおり、私ども企業も常に意識的に学んでいく必要があると考えています。

そうした中でも忘れてはいけないのは、一人ひとりの知識・技術と職業観のアップデートです。ある統計によると、介護士のうち、リスキリングが必要だと思っている方は、全体の91%にのぼります。ただ実際に取り組んでいる方は半分程度だそうです。

これは、スキルアップに使う時間を個人の努力だけで捻出するのはかなり難しいことを意味していると考えています。となると、ご施設や法人側で学びの

意欲を喚起し、時間を創出できるかが、大事になると思っています。人手が不足する中で、そこが経営者の腕の見せ所になってくるのではないのでしょうか。

明日から、
何を始めればいいですか

登坂 考えるきっかけを組織の中につくっていくことだと思っています。時にはあえて刺激的なテーマで考えてもらうことも重要だと思います。これは明日からでもできるのではないのでしょうか。

もちろん、テーマ設定も重要です。そして「排泄ケア」は非常に意味のあるテーマだと思うのです。このテーマは、患者さんやご利用者の「尊厳(Dignity)」に関わる、根源的な問いです。あるいは認知症ケアでもよいかもしれません。考え、議論することを通して、現場で日々行っているケアの当たり前を疑う。一つひとつの技術を見直し、アンラッピングしていく。その積み重ねがケア全体の質向上につながると考えています。

グスタフさん 日本の介護現場で私たちが当たり前のよう提供しているケアの一つひとつを今一度見直すことではないでしょうか。例えば、日本では入浴と食事介助に多くの時間が取られています。ところがスウェーデンではこれらをほとんどやっています。スウェーデンでも以前は行っていたのですが、現場で議論を重ねた結果こうなったのです。日本でも、本人や家族の意見も聞きながら何をどこまで介助するのかをあらためて議論する時期に来ています。そうした見直しのきっかけをつくることは、明日からでもできることだと思います。

ともに考える

TENAからのメッセージ

ユニ・チャームメンリツケ株式会社 代表取締役社長 登坂 英崇

フォーラムの第2部では冒頭に弊社代表取締役社長の登坂英崇が、日本における「TENA」と介護制度の歩み、さらにはこれからの排泄ケアの展望について語りました。

ご利用者中心のケアを

私どもユニ・チャームメンリツケ株式会社は、日本のユニ・チャーム株式会社とスウェーデンのEssity社（旧SCA社）の合弁会社として1997年に設立されました。それ以前は、スウェーデン大使館内に設けられた駐在員事務所にオフィスを構え10年間販売した歴史があります。一貫して取り組んできたのが、排



2008年入社。TENAアドバイザーとして現場を学び、営業リーダーを経て、2025年代表取締役社長に就任。

排泄ケアの標準化とご利用者の尊厳を大切にしたいケアの実現です。ただ、排泄ケアは非常に標準化が難しい領域です。食事・睡眠・活動と並ぶ日常の基本的な営みであると同時に、安心・信頼・落ち着きという心理的側面にも目を向けなければなりません。その人を全人的な存在として見る必要があり、統一基準での数値化と標準化が難しいことは多くのご施設が実感しておられるところかと思えます。

私たちはだからこそ、シンブルに、「ご利用者を中心に」据えることが重要だと考えています。そして、チームで共通の価値観を持ち、ケアを標準化して取り組み、ご利用者個々を全人的にアセスメントする個別ケアを実践することで専門化を図ることが必要です。（図1）

快適なケアで尊厳を守る

弊社では排泄ケアの考え方の基本として、「人間としての尊厳を守る」「快適であること」を掲げてきました。会社設立当時、日本ではまだ介護保険制度が導入されていませんでした。当時は介護施設では1日6〜7回のおむつ交換が常識。病院では2時間おきに交換することも当たり前でした。2000年の介護保険導入後、ユニットケアが制度化され、「ユニットケアといえばTENA A」という嬉しい言葉をいただくこともありました。私がかつて仲間と共に立ち上げた高齢者施設の現場でTENA Aと出会ったのも、この頃になります。

その当時の社内資料を見ると、交換回数が減るという案内だけでなく、「ゆとりの時間」や「他のケア充実」という言葉が記載されています。この当時から、ご利用者のQOLや働く方々のウェルビーイング向上を追求していたことがわかります。

パッドの使用についても、1枚だけで快適に過ごしていただくことや、皮膚に優しいといったフレーズだけでなく、「すっきりおしゃれ」「お一人おひとりの排泄パターン」という言葉も使っていました。今から30年近く前に今と変わ

らない言葉を使っていたことを思うと、我々はずっと「ひとりの人を大切に」「排泄ケアをこの日本に普及したくて活動してきたことをあらためて実感します。

2000年代後半から2010年頃は、病院にもTENA Aを届けようと挑戦を始めた時期です。最初は療養型の病院を訪ねたものの、水様便や強い拘縮、重症化した褥瘡など患者さまの置かれた厳しい現実を突きつけられることとなりました。

それでも、私たちの「ひとりの人を大切に」というTENAのコンセプトをお伝え続けてきました。まるで重ね着けされているおむつのパッドを1枚ずつ外していくように、理解いただける方がひとりずつ増えることを信じて。

その後、地域包括ケアや地域連携が盛んになった時期には、急性期病院へのチャレンジも始まりました。そしてこの時期から、ケアの標準化をより強く意識するようになり、病棟で排泄ケアを回していくためには、標準化は欠かせません。

前述のように、排泄ケアは数値化が難しい領域です。それでもお客様の協力のもと、ビジネススコアカード方式などを使いながら継続的に工夫を重ねて標準化を模索してい

図1

シンプル化 ご利用者中心

標準化
チームケア

専門化
全人的アセスメント

“Simple”であり、“Easy”ではない
Simpleだから深く考えられる

シンプルに「ご利用者中心」と考えるから標準化できる。標準化されたケアの積み重ねが個別ケアを支える。

きました。

急性期の病院では、生命の維持が最優先されます。そのため、排泄ケアに時間や労力、人材を割いていられないという声もありました。私は、急性期だからこそ、ご利用者の尊厳を守るコンチネンスケアが大切だと強く考えます。そして、地域包括ケアシステムが進む今、地域全体で質の高いコンチネンスケアを実現できる必要があると思うのです。

私たち日本人にとって、高齢期の居場所の一つではありません。ステージにあわせてさまざまな介護施設を利用し、時には病院に入院しながら日

ユニ・チャーム メンリッケのミッション

「Make your Happiness with TENA Continence Care」

～私たちは いつもそばで、いつまでもそばで 皆さまの排せつケアを支えます～

未来の排泄ケアを 見据えて

常生活を続けます。したがって、個々の病院や施設でどんなに良いケアをしていても、次の行き先でも同じ質のケアをつなぐことができれば、元の状態に戻ってしまう恐れもあるのです。

そこで私たちは、地域の看護師、介護士の皆さまと協力し、ご施設の垣根を超えて意見を交わし、悩みを相談しながら質の高いコンチネンスケアを実現する、地域の輪を広げていこうと取り組んでおります。

私が介護を志した2000年代前半、介護の現場では芸術的なほどの素早さでおむつを当てられる職員がとても重宝されていました。また、ご利用者に触れる際に手袋をしないほうが温かみがあったといい、といわれる時代もありました。そうした過去からの変化を振り返ると、これから先の5年、10年でも価値観やケア方法は変わっていくはずで

す。変化の大きい時代の中で、私たちユニ・チャームメンリッケは「ケアを処方する」という考え方を大切にしたいと思っています。

スウェーデンでは、パッド（失禁用補助器具）は専門知識を持った看護師が一人ひとりをアセスメントし、処方するものです。私たちはこの仕組みを参考に、ケア処方を通してご利用者の生活全体を豊かにするお手伝いをしたいと考えています。

排泄は 価値観を映す鏡

私たちは、排泄とは人の生き方そのものに関わる重要なものであると考えています。家族にも見られたくないという尊厳、他人に任せたくない

という自立心や主体性、自分のことは自分で決めたいと思う自己決定。こういった一人ひとりの方の生き方や価値観が色濃く反映されるものだと思うのです。だからこそ、ご利用者を中心に据えるというシンブルな考え方に基づいて、スタッフのどれもが同じ思いで実践できる標準化されたケアを行えるようにすることが大切だと思うのです。TENAをご利用いただいている多くのご施設で行っておられる日々のアセスメントは、まさに日本型の「排泄ケア処方」となっているのではないのでしょうか。

そういったチームケアのお手伝いをさせていただく存在として、私たちの製品であるTENAがあり、全国のTENAアドバイザーがいます。

「できるだけ多くの方が、もう一度、トイレに行けるようにして差し上げたい」。これは、ユニ・チャームメンリッケの社員全員の思いです。

1日24時間のうち、排泄にかかる時間は15分から20分程度です。ところが排泄ケアではどうしても、15分、20分のほかに着目して、どう効率よくおむつを交換し、トイレに誘導するかに意識が向きがちです。しかし、それはケアの本質ではありません。

残りのおよそ23時間40分を、できるだけ安心して心地

よく過ごせるようお手伝いする。仮に失禁があったとしても、どのようなケアを処方すればその方がその方らしく過ごせるのかを考える。それが本来の排泄ケア処方だと思っています。

先ほども述べたように排泄は、ご利用者のお身体だけでなく、尊厳、快適、安心といった心にも深く関わる営みです。だからこそ、介護を提供する側の個人的な思想や経験だけに頼るのではなく、組織全体で共通の価値観や理念を持ち、チームでケアを標準化することが欠かせません。

繰り返しになりますが、複雑な仕組みは標準化できません。それは、なぜならば複雑なものは手段が目的化してしまうからです。標準化を目指す際にはシンブルで誰もが目的や意義を理解し、習得できる方法に落とし込む必要があります。今回制定されたISO25557も同じです。この国際規格の趣旨を皆さまとともに学び、試行錯誤をしながら、シンブルで誰もが取り組める、未来のケアの実現に向けて一歩ずつ歩んでいきたいと考えています。

いつもそばで、 いつまでもそばで

私は、排泄ケアに終わったり正解はないと思っています

す。介護や看護の現場にいると、目の前にいるご利用者を「何とかしてあげたい」という思いが強くなるのがよくあります。時にはベストを求めあまり、ご利用者の思いや意思が少し置き去りになってしまうこともあります。でもそれは、現場の皆さまの思いが強いからこそ、起きることだと思ふのです。

私たちは、そんな強い思いを持つ皆さまの支えになりたいと考えています。一つのベストではなく、ベターの選択肢を一緒に考える。いつも完璧な人間などいません。お困りごとができたときにちよつと肩の力を抜いて、「あるベき」姿から少し開放されて、ご利用者のありたい姿と一緒に考える。

私たちユニ・チャームメンリッケは、「いつもそばで、いつまでもそばで、皆さまの排泄ケアを支えます」。

スウェーデンでは排泄ケアは「心のケア」といわれます。ご利用者中心の排泄ケアを実現することはご施設の理念や基準を組織全体に浸透させることにもつながると私たちは信じています。

そして一企業として微力ながら社員一丸となって各ご施設を目指すケアの実現をサポートします。



新製品のご紹介

TENA 多目的シート

TENA 多目的シートは、「正方形タイプの高機能吸水フラットシート」。「多目的」の名称が示すとおり、多様な場面で寄り添い日々の暮らしに安心をお届けします。

2026年10月発売



陰部洗浄

マットレス
汚れ防止

胃ろう
褥瘡などの
ケア時に

4つの特長

1. 抜群の吸収スピード

当社従来品と比べ、吸収スピードが約20%向上!(※)

2. 安心の吸収量

洗浄用シャワーボトル1本分(250ml相当)の吸収量

3. しなやかな質感と上質な肌ざわり

柔らかなトップシートとエンボス加工された吸収体でシルクのような滑らかな肌ざわりを実現

4. ケア現場で育まれた“ちょうど良い”サイズ感

パッド交換中の腹圧がかかることによる尿漏れ、下剤反応時の緩い便、外漏れが続いているときにも

当社オフィスで
吸水実験をしました



多目的な用途



医療的ケア時のベッドシートの汚れ防止



ポータブルトイレの中に。音やにおいの低減



陰部洗浄時のベッドシートの保護



ベッドバスやベッド上での足浴時の補助に



ソファ、椅子の汚れ防止に

※当社従来の洗浄ケア用シートとの吸水速度実験(2026年2月実施、当社調べ)

編集後記

このたびの“世界標準ケア”フォーラムを企画・運営する中で、私自身が印象に残ったのは、目の前の制度や技術から少し離れ、長い歴史の流れの中や、世界の中の日本として介護を見つめ直す視点でした。グスタフさんが紹介されたスウェーデンの壁画の話は、介護やケアが本来、人と人との営みとして太古の昔から存在してきたことを思い出させてくれました。その視点に立つと、私たちが日々向き合う課題や判断基準も少し違って見えてきます。

また、日本では世界でも類を見ない速さで高齢化が進む中、社会全体で支える介護の仕組みを築いてきました。海外から学ぶことは重要ですが、今回あらためて、日本ならではの実践や現場力の価値にも気づかされました。参加者の皆さまから、日本の介護への誇りや可能性を感じる声が多く寄せられたことを嬉しく思います。

「ISO25557」は単なる「基準」ではなく、現

場での実践を通して初めて意味を持つものだと感じています。今回のフォーラムは、その完成形を示す場ではなく、皆さまと対話を始める場でした。アンケートでも、明日から取り入れたいという具体的な声を多くいただきました。

その実践の入り口として、排泄ケアには大きな可能性があります。排泄は日常生活の基本であると同時に、その人らしい暮らしや安心感、尊厳や自己決定とも深く関わっています。だからこそ、「ISO25557」の考え方を日々の実践の中で具体化しやすい領域の一つだと考えています。

今回のフォーラムで生まれた気づきや対話が、それぞれの現場での新たな一歩につながることを願っています。私たちも対話と実践をつなぐ場づくりを続けながら、日本らしい「ケア処方」の実例を皆さまと積み重ねてまいります。

Mild Vind
2026.8 Nr. 6

Contents

P2：世界標準ケアフォーラム
記念講演

P5：パネルディスカッション

P6：ともに考える TENA
からのメッセージ

P8：新製品のご紹介等

Mild Vind(ミルヴィン)は、スウェーデン語で「やさしい風」の意味です。

バックナンバーはこちら

オンラインTENAアカデミー
<https://tena-academy.jp>

